

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

大橋 崇行

はじめに

『小説神髓』（一八八五（明治一八）—一八六（明治一九）年）を書いた時期の坪内逍遙による言説と同時代の心理学との関係については、従来の研究でもたびたび指摘されてきた。たとえば前田愛は、「小説総論」にある「見えがたきものを見えしむる」（上巻第一冊四丁ウ）という記述について、逍遙がフェノロサの美学、スペンサーの進化論、バインの心理学を援用したものとし、その中で特にバインの心理学（Alexander Bain, *Mental and Moral Science: A Compendium of Psychology and Ethics*, 1868）の一部を翻訳した井上哲次郎抄訳『倍因氏／心理新説』（明治一五（一八八二）年）を用いたことで「観察者と観察される〈風景〉との分裂」を起こしてしまったのが『小説神髓』における「写実」の論理だとしている¹⁾。また、富塚昌輝は「一読三嘆／当世書生気質」（明治一八（一八八五）—一九（一八八六）年）に見られる「傍観」について、「百科全書」の田代基徳訳『動物及人身生理』（明治九（一八七六）年）との関わりを指摘し、心理学と一体だった生理学のコードによって作中人物の外見を「ありのまま」に写すことが作中人物の性質を描くことと接続していたと論じている²⁾。一方で、亀井秀雄による一連の『小説神髓』に関する研究では、逍

遙が読んでいた可能性のある英語圏の言説を修辞学を中心に渉猟したものの、結局は「小説の主脳は人情なり」（上巻第二冊一九丁ウ）という一文がどのような言説を根拠として出てくるのかについて説明することができなかった。その結果、亀井はチェンバースの「Information for the people」から菊池大麓『修辞及華文』（明治一二（一八七九）年）で翻訳された部分をバインが書いたものと推測した上で、バインの発想は小説を「美術」として位置づける一步手前のところに踏みとどまっていたものであり、これでは「小説の主脳は人情なり」の一文にたどり着けないとして、逍遙がこれを本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』からある種の論理の飛躍によって導き出したものと位置づけている³⁾。

たしかに大学予備門で教科書として使われていたコックスの修辞学では「The Novel, which is a pure fiction describing the incidents of modern social life or manners, containing every possible variety of character and of scenery, and designed to excite the reader's interest by a rapid succession of events, an involvement of interests, and the unravelling of intricacies of plot.」（W.D. Cox, *The principles of Rhetoric and English Composition for Japanese Students*, 1882, p294）とされており、小説とは現代の社会生活や風俗を描いたフィクションとして位置づけられ、「plot」によってより

読者の興味を惹くように構造化されたものと位置づけられていた。またクワッケンボスの修辞学では、「The Novel and the Romance, on the contrary, admit of every possible variety of character, and afford the greatest scope for exciting the interest of the reader by a rapid succession of events, an involvement of interests, and the unravelling of intricacies of plot.」(G.P. Quackenbos, *Advanced Course of Composition and Rhetoric: A Series of Practical Lessons*, 1874, p375) ところが「plot」によって読者の興味をかき立てることこそが小説の特徴と位置づけられたほか、逍遙が『小説神髓』執筆に当たってよく参照していたと考えられるハートの修辞学でも「A good many novels have a higher aim, being intended by their authors to disseminate theories of life and morals, and even of religion.」(John Seely Hart, *A Manual of Composition and Rhetoric*, 1871, p287) とあり、小説の作者が自身の人生論や道德観、宗教論を広めること、特に直後の箇所ではディケンズの小説において、「social views」、社会に対する作者のものの見方が反映されていることを重視している。これらに限らず、同時代の英語圏の文学史や修辞学、文学をめぐる言説では「人情」ではなく「世態風俗」のほうが「小説の主眼」になるはずであり、あるいは「plot」の存在こそが小説の根拠だと位置づけられるのが通常だったはずなのである。

また、拙稿でも指摘したとおり、こうした言説状況を受けて、この時期には特に『源氏物語』をめぐる三上参次や関根正直、島村抱月などをはじめ、同時代の社会的な価値観や状況、『小説神髓』の用語で言えば「世態」が反映されているかどうかによって物語を評価するという発想が非常に多く見られる。したがって、「人情」を小説で描かれるべきものの中心に据えるという枠組みはけっして同時代の文学において一般的な見方ではなく、むしろきわめて特殊なものだったと言える。

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

それでは、「小説の主眼は人情なり」という枠組みは、どのようにして編成されたのだろうか。想定される一つの可能性としては、本居宣長による『源氏物語』の解釈を援用していたことが挙げられる。一方で注目されるのは、「倍因氏／心理新説」があくまで抄訳であり、原書と対照していけばすぐに明らかになるとおり、翻訳されなかった部分を数多く含んでいる点である。特に、小説や芸術の問題ともっとも密接に関わる「Aesthetic Emotions」の内容は翻訳されていない部分が多いにも拘わらず、これまでの研究ではこれら未翻訳の内容やベインの心理学と『小説神髓』との関係についての検討が不十分だったと指摘できる。

そこで本稿では、「倍因氏／心理新説」だけでなくその原書も含めて検討することで、『小説神髓』における「人情」論の再検討を試みる。その上で、一つの仮説として『小説神髓』の「人情」論がどのような記述に基づいているのかを示し、「人情」論全体の論理を考え直すための方向性を探ってみたい。

一 「現実派」と「心理学」

最初に、『小説神髓』において「心理学」が、どのように位置づけられているのかを確認しておく。

げに小説は情を主として其脚色をばまうくるものゆゑ男をなごの情話のごときはもつとも必須の材料なりかし蓋し情欲多けれども愛憐といふ情合はど重なるものはあらざればなりされば真正の小説にも主として男女の相思をとけども彼の為永派の作者の如くにいふ可らざる隠微を穿ちて卑猥の状をば写さんとせずたゞ人情の秘蘊をあばきて心理学者がときもらせる心理を仔細に見えしむるのみ

(坪内雄蔵『小説神髓』上巻第四冊「小説の裨益」(三三丁ウ))

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

「為永派」の「小説」は「隠微を穿ちて卑猥の状をば写す」ところに止まっておき、これに対するより進化した「小説」の書き方として、「心理学者がときもらせる心理」を分析的に描き出すことが求められている。これは「情欲多けれども愛憐といふ情合はど重なるものはあらざればなり」という発想から言えば、旧来の人情本では人間の「情欲」の位相でしか描けなかったのに対し、より多様な人間の心理を描くべきだという主張だと言い換えることができる。

ここで重要なのは、「為永派」が『小説神髓』の末尾近くにある「主人公の設置」において、「現実派」として位置づけられている点だと思われる。

主人公を造作するに二流派あり一を現実派と称し一を理想派と称す所謂現実派は現にある人を主人公とするにあり現に在る人を主人公とするとは現在社会にありふれたる人の性質を基本として仮空の人物をつくることなり為永春水をはじめとして其流を汲む人情本作者はみな此流派の者なるべし所謂理想派は之に異なり人間社会にあるべきやうなる人の性質を土台として仮空の人物を作るものなり

『小説神髓』下巻第九冊「主人公の設置」、四三丁ウ

「主人公の設置」では、現実の世界に生きている人そのものを言葉によって再現的に描こうとする「現実派」と、現実の社会にいる人間「性質」から特定の要素を引き出し、ステレオタイプ化することによって架空の人物を造形する「理想派」とを対立的に論じている。拙稿で指摘したとおり「理想派」は現代というマンガやアニメーション、ライトノベルで用いられるキャラクターの方法と通底する枠組みを持ったものであり、これに対して「現実派」はより進化したものとして位置づけられ、これを改良していくことにこそ江戸期までの「小説」とは異なる近代の新しい小説の可能性を見いだしていたと考えられる。その中で、「人情」を描き、「心理学者」のように人間の心理を分析し

ていくという発想は「現実派」の小説に限定されていく。すなわち、逍遙は単純に人間の内面を描くように物語を書き換えていくことで小説の近代化が達成されると考えていたのではなく、それはあくまで「現実派」において行われるものとして、小説の具体的な書き方まで想定していた。「理想派」が持つキャラクター的な方法はどんなに作中人物の内面をより複雑に描いていたとしてもそれはあくまで旧来の「小説」が持つ方法なのであり、現実に行き着いている人間を言葉によって再現するからこそ、現実の人間の「心理」を分析する「心理学」の成果を小説にも持ち込むことが可能になると位置づけている。こうした議論を前提として、すでに現実世界における人間と同じような作中人物の「性質」を描くことができている「現実派」が、さらに「情欲」の面でもより進化した、近代にふさわしい「小説」を書くことができるという発想を持っていたのである。

このように「小説神髓」における「人情」と「心理学」との関係をつ捉えたとき、「為永派」が現実に行き着く人間の「情欲」を描いていたという指摘がきわめて重要な意味を帯びてくる。なぜなら、ここで逍遙が論じた「情欲」は、「人情」あるいは「七情」と密接に拘わる語として位置づけられていたためである。

彼（にんげん）の人間の情欲ほど描きあたかるものはあらじ喜怒哀愛悪哀懼欲の七情も其皮相のみをあらはすにはさまでむづかしきことにあらねど其神髓を見えまくほりせば画工の力もて及ぶべくもあらず

（坪内雄蔵『小説神髓』上巻第一冊「小説総論」、三三丁ウ）
『小説神髓』の論理では、「情欲」を小説において書くことの困難がある点についての指摘だけでなく、「人情」とは人間の情欲にて、所謂百八煩惱はなり（坪内雄蔵『小説神髓』上巻第二冊「小説の主眼」、一九丁ウ）とされ、この「情欲」は「人情」と置き換えられるものであり、新しい「小説」において描かれるべきものだという。したがって問題は、この「情欲」（情欲）がどのような概念だったのかとい

うことになる。このとき「はつしよん」というルビから考えれば、まずはこれを「Passion」の翻訳語として捉えるべきであろう。

現代において「Passion」は、恋愛関係における情欲のほか、特に人間の理性的なあり方に対する激しい情熱や感情を示す語として捉えられている傾向が強い。しかし、明治期の英和辞典類においては、こうした現代の語感とは少なからず異なる概念として把握されていた。

たとえばヘボンの『和英語林集成』では、初版（慶応三（一八六七）年）で「Jo; jii; ikiji; ki」第二版（明治五（一八七二）年）で「Jo; jii; ki, joai, kurushimi, kutsu, nani, shushin, shujaku」と翻訳語が宛てられており、「情」のほかに「意地」や「意気地」「氣」にはじまり、「情愛」「苦痛」「執心」などに翻訳がなされている。その結果、高橋新吉・前田献吉・前田正名『和訳英辞書』（明治二（一八六九）年）や荒井郁之助『英和对訳辞書』（明治五（一八七二）年）で「情（好。悪。望。悦。哀。怒。恨等ナリ）」と同じ翻訳語が宛てられており、感情の昂ぶりというよりは人間の多様な感情を総体として概括する用語として理解されていたことが窺われる。こうした中、柴田昌吉・子安峻『英和字彙』（明治六（一八七三）年）では「情（喜怒哀楽悲悪欲）、嗜好、耶蘇ノ苦難」と翻訳されており、『礼記』『礼運』篇に見られる「喜怒哀楽懼欲」の「七情」に近い概念として「Passion」が理解されていたことがわかる。こうした「Passion」の翻訳状況から考えると、逍遙が「人間の情欲」を「喜怒哀楽悲懼欲の七情」と併置したのは、同時代において「Passion」の翻訳語としての「情欲」（情欲）が「七情」という用語と置換可能であるという発想が少なからず一般化していたことを受けてのものだったと考えることができる。

二 心理学に基づく「情緒」

一方で問題となるのは、『小説神髓』では「情欲」（情欲）「人情」（人情）「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

「七情」だけでなく、「情緒」という用語が見られる点である。たとえば、「脚色の法則」では、次のように論じられている。

笠頓翁の情史の如きは其物語の性質より其脚色の塩梅まで我為永派の情史に似たれどなほ野卑なりとの嘲笑をば世上に得ざりし所以のものは豈た書中の人物事件が高尚なりしによるのみならんや其模写法の美妙にして彼の有形なる態度をうつさで他の無形なる情緒をしもいとつまびらかに写せしゆゑなり我将来の小説作者は宜しく此區別に眼を注ぎて其新作をものすべきなり

（坪内雄蔵『小説神髓』下巻第八冊「脚色の法則」、三〇丁オ）
ここではリットンの「情史」、すなわち恋愛を描いた物語が「為永派」の人情本に似ているとしながら、リットンの小説のほうが「為永派」の人情本に比べてより「高尚」なものであると位置づけられる。その論拠として示されているのが、「其模写法の美妙にして彼の有形なる態度をうつさで他の無形なる情緒をしもいとつまびらかに写せしゆゑなり」である。前掲の富塚昌輝による論では「一読三嘆／当世書生氣質」における「傍観」のあり方と「百科全書」の「動物及人身体理」との関係が指摘されていたが、「有形なる態度」「無形なる情緒」が持っている内容はベインの心理学とより接続しうるものであり、その部分は『倍因氏／心理新説』でも訳出されている。

他人ノ感応ヲ知ラント欲セバ、唯々其外面ニ發現スル徴候ニヨリテ、之ヲ推察セザルヲ得ズ、徴候ハ、第一、表識、第二、行状、第三、思想ノ経過是レナリ、

（井上哲次郎抄訳『倍因氏／心理新説』第三、七丁ウー八丁オ）
同時代の心理学は、生理学と一体となっているものだった。概説である『百科全書』の『動物及人身体理』を除けば、この時期に日本に入ってきていたのは、ジョセフ・ヘブンの心理学（Joseph Haven, Mental Philosophy, 1857の一八六九年刊（第二版））を翻訳した西周「奚般氏著／心理学」（一八七五（明治八）一七六（明治九）年）

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

か、もしくはベインの心理学であり、その際により生理学との関係をより明確に記述しているのがベインの心理学の特徴である。ここでは、一人の人間の「感応 (egoism)」を、その人物の言動など他者から認知可能な生理的領域に基づいて推論的に把握することができると言うことが論じられており、逍遙が論じた「有形なる態度」が「心理学者」のように「情」を写し取りうるものだとなれば、たしかにベインの心理学との接続が読み取られる。

また、『小説神髓』の前半の理念的な記述と、後半部分の具体的な小説作法の内容とが一体であったことや、『小説神髓』の特に「現実派」をめぐる議論において「性質」と「情緒」とが進化論的に位置づけられていたことを考えれば、最後の章段に当たる「叙事法」での記述が、ここで論じられた枠組みをより具体的に読み解いていくための手がかりとなる。

人物の性質を叙するに二個の法ありかりに命けて陰手段陽手段とす所謂陰手とはあらはに人物の性質を叙せずして暗に言行と挙動とをもて其性質を知らする法なり我國の小説者流はおほむね此法を用ふるものなり陽手段は之に反してまづ人物の性質をばあらはに地の文もて叙しだして之を讀者にしらせおくなり西洋の作者は概して此法を用ふるもの也(概世士伝第七套那以那姫の性質を叙する条下を見よ)想ふに後者を用ふるは前者を用ふるより難かるべし蓋し後者(陽手段をいふ)を用ひんとすればまづあらかじめ心理学の綱領をし知り人相骨相の学理をしも会得せざれば叶はぬことなり

(坪内雄蔵『小説神髓』下巻第九冊、四七丁ウー四八丁オ) ここでは「陰手段」「陽手段」という人間の「性質」を描き出すための二つの方法が示される。作中人物の言動や動きによってその「性質」を描き出すという、逍遙によれば「我國の小説者流」が用いていた「陰手段」の小説の方法とは別に「陽手段」と呼ぶべきものが

あり、これは「地の文」において作中人物の「性質」を描き出すもの、特に「概世士伝第七套那以那姫の性質を叙する条下」で示されたような小説の書き方だとされる。この場合、具体的には次の部分を指すことになる。

件の那以那姫は。只一人子の事にしあれば。父母の鍾愛甚ならねど。其性質極めて我儘なるから。時には父母のもてなやみぐさ。と。なりにし場合も。日頃。の行通てみな。世の乙女。の例に似ず。且又此土の習慣として。年尚若く嫁せざる時は。行住坐臥に至るまでも。総じて父母の指名を奉じ。之を守るを常とする。なるに姫のみ独り之をなさず。一挙一動。苟にも。他人の制御を受けるを嫌て。自己が所欲行ひつゝ。不羈独行してさながらに。自由の権をば得たるに似たり。されども其性男子に似て。所謂不負魂あり。おさく文学、技芸に長じて。閨秀の名四方に高く。父母また之を誉とせり。

(ロルド、リットン原著／文学士逍遙遊人翻訳『開卷悲憤／概世士伝』初編、明治一八(一八八五)年、二二四頁)

引用箇所の冒頭部分以下では、作中人物の「性質」を、その背景となつた来歴を含めて記述し、さらにはそこから生じる作中人物の心情を、地の文によって物語世界における事実として語っている。すなわち逍遙は、「現実派」としての「為永派」による人情本でも作中人物の「性質」を描くことはできていたが、それは「陽手段」、すなわち作中人物の言動のように他者から視認可能な領域から類推的に記述するだけに限られていたのだという。これに対して、リットンの小説のように人物をめぐるさまざまな背景を踏まえることで、作中人物の表面的言動だけでは窺い知ることのできない領域まで含めて記述することを求め、そこに「小説」の進化と改良を見いだしていた。このとき、「心理学の綱領を知り人相骨相の学理をしも会得」することが必要になるというように、ベインの心理学から導き出された「有形な

る態度「無形なる情緒」という議論を、「情緒」と「性質」とが密接に關与するという前提をもとに接続させ、それによって心理学を用いた「小説」の具体的な書き方を構築していたのである。

三 「feeling」の翻訳語としての「人情」

以上のような『小説神髓』における「心理学」をめぐる論理は、『倍因氏／心理新説』卷三の「情緒論」から導き出されるものである。したがって、ここで用いられた用語を逍遙がそのまま使っている可能性が高い。それでは、『小説神髓』のこうした議論で用いられた「情緒」と、冒頭にある「小説総論」や「小説の主眼」などで主に用いられていた「情欲」「情欲」「人情」「七情」は、どのように拘わるのだろうか。

まず、「情緒」から確認すると、これは『倍因氏／心理新説』で次のように定義されていた。

凡ソ感応ハ、感覺情緒ノ二大部分ニ分ツ者ナルガ、今此ニハ情緒ノミヲ論ゼントス、然ルニ之ヲ論ゼンニハ、先ツ感応ノ資性ヨリ始ムルヲ便ナリトス、

(井上哲次郎抄訳・大槻文彦校訂『倍因氏／心理新説』第三、一丁オ)

この部分の原文は「Of the two great divisions of the Feelings — Sensations (with muscular feelings), and Emotions — the second has now to be entered upon. As a preparation, it is expedient to resume the characters of Feeling in general.」(P215)であり、したがって「感覚」が「Sensations (with muscular feelings)」「情緒」が「Emotions」「感応」が「Feelings」の翻訳語であることがわかる。その上で「情緒」は「情緒ハ、感覺ノ如ク、初発ノ感応ニアラズシテ、派生、即チ複雑ノ感応ナリ」(井上哲次郎抄訳・大槻文彦校訂

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

『倍因氏／心理新説』第三、一〇一ウ。原文は「The Emotions, as compared with the Sensations, are secondary, derived, or compound feelings.」と定義されている。「情緒 (Emotions)」とは「複雑ノ感応 (compound feelings)」であり、したがって「情緒 (Emotions)」と「複雑ノ感応 (compound feelings)」とは用語として双方を置き換えることが可能であるという論理になっている。

このとき「複雑ノ感応 (compound feelings)」とは、具体的には「相対 (Emotions of Relatively)」「恐怖 (Terror)」「柔和 (Tender Emotions)」「主我 (Emotions of Self)」「権勢 (Emotion of Power)」「憤恚 (Irascible Emotion)」「追究 (Emotions of Action — Pursuit)」「知力 (Emotions of Intellect)」「同情 (Sympathy)」「理想 (Ideal Emotion)」といった、多様な人間の感情を指す。

ここで想起したいのは、『小説神髓』で論じられた「情欲」の語が、ヘボンの『和英語林集成』以降は人間の多様な感情を表す「Passion」の翻訳語として捉えられ、おそらく柴田昌吉・子安峻『英和字彙』で「情 (喜怒哀楽悲惡欲)」「嗜好、耶蘇ノ苦難」と翻訳されたことを介して、「喜怒哀楽悲惡欲の七情」「人情」と置き換えられていたことである。このとき「Passion」を現代のように恋愛関係における情欲や激しい情熱と捉えるのではなく同時代の枠組みで理解すると、多様な感情を含む「複雑ノ感応 (compound feelings)」としての「情緒 (Emotions)」との差異が見いだせなくなり「Passion」「compound feelings」「Emotions」の三つの語を同じような概念として捉えることが可能になっていく。

このような概念規定を踏まえた上で『小説神髓』を確認すると、「Passion」を「情欲」という同時代の翻訳語のまま用いており、「Emotions」の翻訳語である「情緒」の語も用いられている。一方で『倍因氏／心理新説』で「複雑ノ感応」と訳されていた「compound feelings」の「感応」という用語は、『小説神髓』全体を通じて用い

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

られていない。この場合、ベインの心理学における「Passion」「compound feelings」「Emotions」と同時代における翻訳語の状況、そして『小説神髓』の論理における「情欲」「七情」「人情」「情緒」の関係を考えると、逍遙が「compound feelings」の翻訳語として「人情」を宛てていた可能性が浮上してくる。

「Feeling」の翻訳語としては、前掲の『和英語林集成』の初版で「Feelings」が「Kokoro mochi; kinochi; kibun; kimi; chikaku; oboye; shone」、『英和字彙』で「覚官（五官の一）、感動、知覚、慈心」とされているほか、やや時代を下ってイーストレキ・棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書』（明治二二（一八八八）年）で「五官」覚官、感動、知覚、慈心、「哲学」感応」とある。したがって『英和字彙』の翻訳語が踏襲されており、これらにおいては「人情」が翻訳語として宛てられてはいない。しかし、『小説神髓』より後に出版した島田豊『増訂挿図／和訳英字彙』（明治二五（一八九二）年）では「覚感、感触、感応、知覚、意思、情、人情、意見」と「人情」が翻訳語として採用されている。この場合、ここで「人情」という翻訳語が加わる形で翻訳のあり方に変化が生じたことには、明治二十年前後の時期に何らかの形で「Feeling」を「人情」と翻訳する枠組みが成立していたと考えるのが妥当であろう。このとき一つの可能性として想定できるのが、『小説神髓』とベインの心理学との関係や、それに基づいた言説だったのではなかったか。

たとえば、『小説の変遷』には次のような記述が見られる。

真の小説神史（那ベル）はいかなる世に現はるゝぞ其奇異譚と異なる所以はそもまた何等の辺にあるや曰く那ベル即ち真成の小説の世に行はるゝは概ね演劇衰微の時にあり其故はそもいかにといふに総じて文化の浅かりける未開蒙昧の世にありては人皆皮相の新奇をよるこび眼のつけごころ密ならねば何にててもあれ異常にして少々注目を促がすべき新奇の性質あるものあれば競

ふてこれをもてはやして面白きものと思ふは常なり且また此比の人の情は今の人情とはおなじからで怒りても喜びてもまた哀みても楽みても総じて頗る激切なるから七情おのづから其挙動と其顔色とに見はれつゝ限なく人にも見られしなり是併ながら道理力の作用きはめて微なりしからに一時一旦の情欲をば抑へ止むることかなはで心に思ふことをさへにあらはに外面にうちいだしつまたは挙動にもみ見えたるなり

（坪内雄蔵『小説神髓』上巻第二冊「小説の変遷」、一四丁オ）
演劇が流行していた時代の人々は「七情」が動作や表情といった他者にも視覚的に認識されるところに現れて出ていた一方で、近代の人々はそうした「情欲」の発露が押さえられる。その要因として、より時代の進んだ人間は「道理力」が発達しており、感情をより表に出さないようになっていたためだという。言い換えれば、人間の「情欲」の描き方を、倫理観のあり方をめぐる進化的な枠組みで捉えている箇所である。

こうした心理と倫理との関係は、『倍因氏／心理新説』では見られない。しかし、『Mental and Moral Science』という原書の書名が示すように、ベインの心理学のうち『倍因氏／心理新説』では翻訳されなかった部分では、むしろ論の中心を成す枠組みである。

まず、「Feeling」が高まり、それが身体に表象される瞬間について述べた部分を見てみよう。

An outburst of feeling passes through the stages of rise, culmination, and subsidence.

What we call a state of feeling, or emotion, is a transitory outburst from a permanent condition approaching to indifference. There is every variety of mode as respects both degree and duration. A feeble stimulus can be continued longer than a powerful one; while every intense display must

be rendered short by exhaustion.

Practically, the moment of culmination of feeling, or passion, is the moment of perilous decisions and fatal mistakes. (Alexander Bain, *Mental and Moral Science: A Compendium of Psychology and Ethics*, 1868, p.224)

こゝでは外部からの刺激によつて「feeling」が高まることを「passion」と呼ぶべき状態となり、その作用が人間の認知は判断に影響を及ぼすものと位置づけられる。こゝに於て「feeling」や「passion」を抑制するのが、人間の知性の進化と倫理観の獲得に関わる論理である。

The Moral Acquirements come under the general conditions of Retentiveness.

In heightening, or in detracting from, the natural strength of feelings and volitions, we are aided by all the circumstances enumerated in regard to the attainments of the intellect.

(Alexander Bain, *Mental and Moral Science: A Compendium of Psychology and Ethics*, p.385)

インテンシビティ、倫理的な知性 (Intellect) の獲得によつて「feeling」をコントロールするにつれて、時間を経て進化して行くにつれてより適切に行われるようになるという。すなわち、進化論の枠組みに基ついた倫理観の向上と感情の抑制、それによる他者の心情把握の困難について論じている。この場合、インテンの用語におおつて倫理観 (moral) によつて抑制するものが「passion」と「feeling」であり、逍遙の論理で「道徳力」によつて抑えることが出来るのが「情欲」と「人情」である。したがって「passion」の翻訳語が「情欲」、「moral」の翻訳語が「道徳力」、「feeling」の翻訳語が「人情」だったと考えると、逍遙の論理がインテンの心理学をそのまま援用したものだったことになる。この点を確認した上で、改めて「小説の主眼」に

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

おける「人情」論を見てみよう。

小説の主眼は人情なり世態風俗これに次ぐ

(坪内雄蔵『小説神髓』上巻第二冊「小説の主眼」一九丁ウ)

先述のとおり、同時代に入ってきた英語圏の文学史や修辞学では、小説であることの根拠を「Plot」の存在や「小説神髓」の用語でいえば「世態風俗」のほうに見いだそうとする発想が大半を占めており、「小説」の中心を「人情」に見いだそうとする発想はきわめて特異なものだった。さらに改めて指摘するまでもなく、「小説の美術たる由を明らめまくなれば」(『小説神髓』上巻第一冊「小説総論」一丁オ)というように、小説を芸術の一ジャンルとして明確に位置づけるというのも、同時代にはほとんど見られない枠組みである。

これに対して、同時代の英語圏から入ってきた書籍のうち、逍遙が読んでいた可能性の高いものの中で、人間の心理、内面を描くことに小説における芸術性の根拠を見いだしていたのが、インテンの心理学のうち、『倍因氏／＼心理新説』では訳出されなかった部分である。

(3) The wide department of Aesthetics, in like manner, supposes a knowledge of the laws and varieties of feeling. The Poetical and Literary Art, for example, is amenable to improvement, according as the human emotions are more exactly studied. The science of Rhetoric, for the time being, contains the application of the science of mind in general, and of the feelings in particular, to literary composition.

(4) The theory of Human Happiness reposes immediately on the knowledge of the human feelings. This must ever be the point of convergence of all the sciences, but it is the science of the feelings that gives the line of direction.

(5) The Interpretation of Human Character, the understanding of men and their motives, will grow with the improved

「人情」と心理学 坪内逍遙『小説神髓』再読

knowledge of the feelings. Not merely the emotional character as such, and the conduct, or voluntary actions, whose motives are the feelings, but also much of what seems purely intellectual tendencies, may derive elucidation from the present subject. The intellectual forces are, in all men to some extent, and in many men to a great extent, swayed by emotion. In particular, the man of Imagination, in the proper sense of the word, the poet or artist, is determined, in his productions, as much by feeling as by intellect.

(Alexander Bain, *Mental and Moral Science: A Compendium of Psychology and Ethics*, 1868, p225)

ヘインはこゝで文学を明確に芸術の一ジャンルとして明確に捉えており、それらが人間の「feeling」をより正確に研究し、人間を進化的に改良していくことが可能になるジャンルとして位置づけている。¹⁾「The Interpretation of Human Character, the understanding of men and their motives, will grow with the improved knowledge of the feelings.」つまり、人間の性格の解釈やその行動についての動機理解は感情についての知識によってもたらされるものと捉えた上で、それを実現できるのが「poet or artist」であると位置づけた。『小説神髓』における記述にしたがうのであれば、まさに「人情の秘蘊をあばきて心理学者が説きもらせる心理を仔細に見えしむる」(坪内雄蔵『小説神髓』上巻第四冊「小説の裨益」三三三丁オ)ことを文学の目的として位置づけたのがヘイン発想だったのである。

おわりに

以上、本稿では『小説神髓』における「人情」をめぐる議論を、ベインの心理学との関係から再考してきた。その中で「Passion」「com-

pond feelings (feeling)」「Emotions」と「情欲」「七情」「人情」「情緒」との関係について確認し、逍遙の「人情」がベインの心理学における枠組みに基づいている可能性について検討してきた。

従来の研究では、逍遙がベインの心理学を原書で読んでいるかどうかは不明だとされてきており、本稿での検討は一つの仮説である。しかし、同時代に日本に入ってきた心理学が「百科全書」における概説的な言説のほかにはヘボンとベインの二種しかなく、その中で『小説神髓』が「心理学」を参照することを求めつつ、明らかに『倍因氏心理新説』では訳出されていない内容と重なる論理が含まれていること、また、小説の中心的な目標を人間の心理や内面に見いだす発想がきわめて特異なものであることを考えれば、逍遙はベインの心理学を原書で参照しており、ほとんどそれを引き写す形で「小説の主眼」における「人情」を論じていたと考えるのが妥当であろう。

また、同時代の「小説」をめぐる言説と照らした場合には、逍遙の「人情」論を起点として日本の近代小説の出發を「内面」の記述に求めるという発想は、改めて留保が必要なものだとも指摘することができる。逍遙の「人情」論を起点として人間の「内面」を描くことで日本文学の「近代」が訪れたと単純に捉えるのではなく、「人情」を中心に据えた「小説」の発想がどこまで流通していたのかを再検討し、そうした発想を共有していない文学が大半だった事実を踏まえて、この時期の文学について考えていくことが必要であろう。したがってこの問題については、稿を改めて論じていきたい。

注

- (1) 前田愛「『小説神髓』のリアリズムとはなにか」、『國文學 解 釈と教材の研究』第三三巻第一号、一九七八年一月、三六頁
- (2) 富塚昌輝『ノベル近代小説という問い 日本近代文学の成立期をめぐって』翰林書房、二〇一五年、四三頁

(3) 亀井秀雄『小説神髓』と近代』、岩波書店、一九九九年、四九―五一頁

(4) 拙稿「人情」は〈近代〉のものか 明治期における『源氏物語』受容と坪内逍遙『小説神髓』、久保朝孝編『源氏物語を開く 専門を異にする国文学研究者による論考54編』、武蔵野書院、令和三(二〇二二)年三月、七―九頁

(5) 拙稿「Hero」と「男本尊」——反キャラクター論としての坪内逍遙『小説神髓』、『成蹊國文』第五六集、令和五(二〇二三)年三月、三五―四三頁

(6) 「小説の主眼」で、この「情欲」に対して「ばつしよん」とルビが振られている一方、「小説総論」「小説の裨益」ではこれに「じょうよく」のルビが振られている。「ばつしよん」のほうは明らかに逍遙が意識的につけているものだと思う一方、「じょうよく」のほうは逍遙自身がつけたものなのか、印刷の際に付されたものなのか判断ができないものの、ひとまず同じ熟語として扱うこととする。

(7) 注(2)に同じ。

(8) 原文は「For a knowledge of the feelings of others, we must trust to external signs, interpreted by our own consciousness. The signs are (1) the Expression, (2) the Conduct, and (3) the indications of the Course of the Thoughts.」(Alexander Bain, *Mental Science A Compendium of Psychology, and the History of Philosophy*, 1868, p221)

〔付記〕本研究は日本学術振興会の科学研究費補助金(19H01234)の助成を受けたものです。

プロフィール

成蹊大学文学部日本文学科准教授。主な著書に『落語と小説の近代文学で「人情」を描く』(青弓社、二〇一三年)などがある。